

# Kit-Build方式概念マップが促した講義内容の構造的理解

茅島路子\*, 浅賀圭祐\*, 宇井美代子\*, 小田部進一\*\*, 林雄介\*\*\*, 平嶋宗\*\*\*  
\*玉川大学, \*\*関西学院大学, \*\*\*広島大学

## 目的

### Kiewra(1991)の講義理解モデル

Mayer(1984)のテキスト理解モデルの援用

- 選択** :文章から情報を選択し、作業記憶に加えること
- 内的関連づけ** :選択された情報を、作業記憶の中で結束した構造に体制化すること
- 外的関連づけ** :体制化された情報を、長期記憶の中に既にある、似たような他の知識と結び付けること

### 講義理解には講義内容の構造把握が重要

教師が注意すべき点 :

- 教師自身が講義内容の構造を意識する
- 受講生が構造を把握できるように講義する

教師に講義内容の構造化への注意を促す方法 :

- 大学の集中授業に**Kit-Build方式概念マップ**を導入し、2012年度から7年間実践

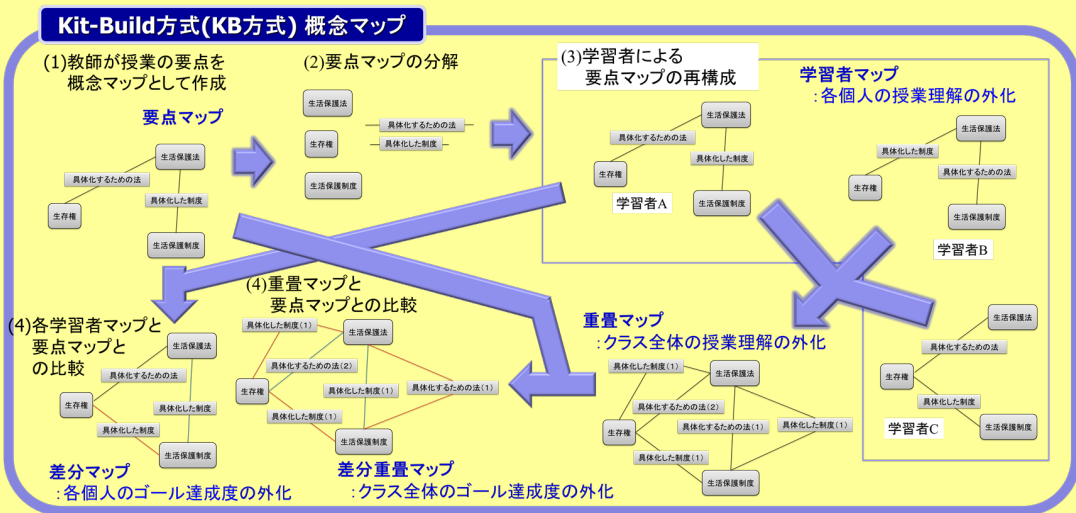


図1 Kit-Build方式概念マップ

受講生の講義内容の構造的理解の外化が  
(1) 教師にどのような授業リフレクション  
(2) どのような講義活動の変化  
を促すかをインタビューによって検討する

## 分析と結果

2013年度→2015年度 : 教師自身が講義内容の構造を意識して主に分量を改善

2013年 :

- ② 講義した内容と受講生の理解した内容の乖離(KBの一致率)を認知
- ③ 授業の到達目標の見直しの必要性を認識
- ③ 受講生が講義内容の構造を把握できる講義に改善する必要性を認識

授業の問題なのか、KBの使い方が理解できていないことが原因かも

受講生は上位・下位概念の関係として結びつけるのが難しい

援助観がノーマライゼーションを包括していることを理解できていない

援助観は、講義ノートには援助観を書いているが、スライドには書いていない

受講生が概念間を正確に結び付けたり、概念を正確に使うことができる授業に努力して改善しなければならない

援助観は授業で軽くし受講生の構造的理解度が向上が触れなかった

この作業を通して授業の到達目標をもう一度、見直すことと、もう一度授業の構成を作り直すことをしてみようか

2013年度のKBの一致率から受講生の構造的理解度の低い箇所を把握し

2015年度→2016年度 : 受講生が構造を把握できるように講義内容と時間を改善

2015年 :

- ① 教師自身が講義内容の構造を整理
- ① 受講生が講義内容の構造を把握できるように講義内容の重要概念を厳選し分量を削減
- ② 受講生の構造的理解度が向上
- ③ 価値観に関わる講義を加えたい

2013年度の講義速度で受講生はついてくることができると考えていたが、そうではなかったとうすうす感じていたことがKBの一致率で示された

2013年度に比べて内容は少なくなっているが、限定された援助観について多くの受講生の構造的理解度が向上している

2013年度に比べて内容は少なくなっているが、限定された援助観について多くの受講生の構造的理解度が向上している

この内容だけで良いのか

教師が重要だと考える概念を選択して授業を設計していたが、受講生が基本的知識を確実に定着できることを考え講義内容を厳選した

自分なりに講義内容の構造の整理をした

受講生が講義内容を構造化する課題があることを意識して授業設計をし直した

時間があれば、もう少し理念的なもの、思想的なものについて学生と一緒に考える価値観にかかわるような内容を講義したい

2016年 :

- ① 講義時間を延長し異なる内容を分離して講義
- ① 受講生が構造を把握できる講義を意識
- ② 受講生が十分に構造を把握できる講義ができた
- ③ さらなる受講生の構造把握のための改善を提案

2013・2015年度の私の担当は1コマと決めた後で、授業準備を進める中で、少し無理をして二つの要素を1回の授業で伝えてきた

授業の前半で扱ってきた内容に割く時間を増やすことで、授業の後半で扱う内容を扱いきれないことが明確になってきた

KBを用いることで、「学生が授業内容を構造的に理解できるように講義する必要がある」ことを意識させられた

講義内容の諸要素とオムニバス授業の各担当教師の授業内容が関連していることに気づいた

受講生が構造を理解できるような講義を意識して内容の改善を進めたことで2倍の時間が必要と判断した

受講生が十分に構造的に理解できる講義ができた

受講生にこれ以上の構造的理解を求めるならば、受講生が授業者と異なる組み合わせをした箇所を共有し、教師と受講生で質疑応答をする授業に改善したい

## 考察

KBが示す受講生の講義内容の構造的理解状況に基づく授業の振り返りを重ねることが教師に講義内容の構造を意識させ、受講生に講義内容の構造的な理解を促す講義設計や講義活動へと変容させることが示唆された。

## 方法

2013年, 2015年, 2016年のKBマップに基づく宗教学の授業担当教師へのインタビュー分析

インタビューの発言内容を形態素解析し、図1に示す要点マップを3つの領域に分類し、要点マップのノードの名詞の出現頻度を求めた。表1に示すように領域Aの出現頻度が各年度に共通し高い傾向にあった。そこで、領域Aに着目、領域Aのノードやリンクの名詞と授業という名詞が出現するインタビュー部分を抽出し、領域Aの部分について授業リフレクションと、講義活動の変化を検討。

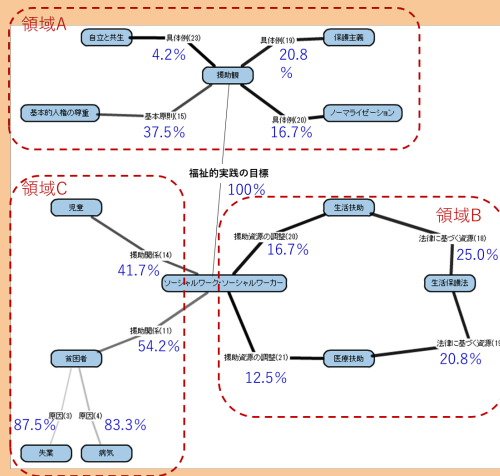


図2 2013年度要点マップ

表1 各領域の要点マップのノードの名詞出現頻度

ノード出現頻度	2013年度		2015年度		2016年度	
	出現頻度	割合	出現頻度	割合	出現頻度	割合
領域Aの合計	107	37.9%	38	39.6%	114	79.2%
領域Bの合計	113	40.1%	18	18.8%	26	18.1%
領域Cの合計	62	22.0%	40	41.7%	4	2.8%
全領域の総数	282	100.0%	96	100.0%	144	100.0%

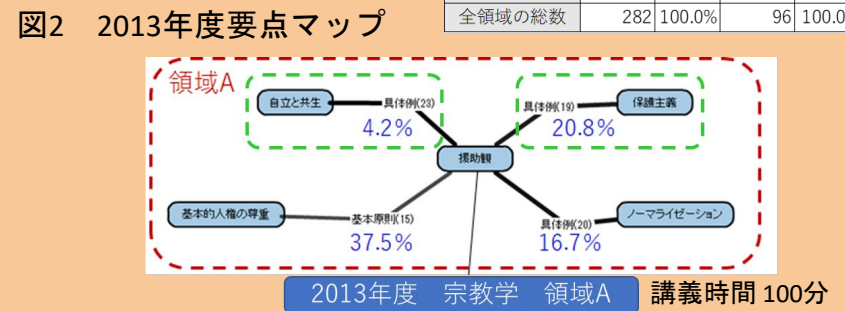


図3 2013,2015,2016年度要点マップの領域A

(注)図2や図3の数値(%)は要点マップと学習者マップの各リンクの一致率であり、図1のゴール達成度に当たる。

- ① 昨年度のリフレクションを基に今年度改善したこと
- ② 今年度の授業後のリフレクション
- ③ 次年度の向けての改善案

参考文献  
Hirashima, T. et al.(2015) Framework of kit-build concept map for automatic diagnosis and its preliminary us, RPTTEL 10, 17.

茅島ら(2019) 学習者の授業内容理解の「見える化」が促す授業リフレクション, 玉川大学文学部紀要 (60), 97-118.  
Kiewra, K. A. (1991) Aids to Lecture Learning, Educational Psychologist, 26(1) 37-53.

李婷(2016) 講義の「話段」の多重構造を捉える手がかりとしてのメタ言語表現の分析, 早稲田日本語教育学, 21,57-76.  
[謝辞] 本研究はJSPS科研費19K12278の助成を受けた。